

P-233 肺転移を来たした脱分化型後腹膜脂肪肉腫の一例

安蘇 鉄平・加藤 雅人・栗原 啓・園田 幸生
上田 純二・大城戸政行・一宮 仁・中垣 充
国家公務員共済組合連合会 浜の町病院 外科

症例は 58 歳女性。平成 14 年 6 月、後腹膜腫瘍に対し腫瘍切除術施行。病理検査の結果、高分化および低分化成分の混在する脂肪肉腫の診断であった。その後経過観察されていたが、平成 17 年 1 月の腹部 CT で腎周囲に腫瘍の再発が認められたため、同年 2 月腫瘍摘出術施行。病理検査で再発性高分化型脂肪肉腫の診断であった。同年 7 月、CT 上第 11 胸椎左側に径 24mm の結節を認め、徐々に増大傾向を認めたため平成 18 年 1 月、胸腔鏡下左肺下葉切除術施行。病理診断は転移性脱分化型脂肪肉腫であった。一般に、低分化あるいは未分化脂肪肉腫は高分化型のものよりも転移を来たしやすいとされているが、本症例は初回術後 2 年半で高分化型の局所再発を認め、その半年後に脱分化型の肺転移を認めた。典型的な病理学的特徴を有する興味ある転移性脂肪肉腫の一例と考えられるため、文献的考察を加え報告する。

P-234 大腸癌肺転移 115 手術症例の検討

中島 由貴¹・秋山 博彦¹・榎本 豊¹・西村 仁志¹
山本 光伸²・小泉 潔³

埼玉県立がんセンター胸部外科¹；北多摩病院 外科²；日本医科大学 外科・呼吸器外科³

【目的】当センターにおける、大腸癌肺転移の手術成績に関して検討した。【対象】1978 年から 2005 年 12 月までに大腸癌肺転移に対する初回手術を行い、肉眼的に完全切除がなされた 115 症例。【方法】end point は初回肺転移術後の生存期間として、以下の因子に対して Kaplan-Meier 法を用いて生存率を算出、有意差検定は log-rank test で行い、 $p < 0.05$ を有意とした。予後因子は、性別、DFI、原発巣因子(発生部位、分化度、深達度、リンパ節転移、ly 因子、v 因子、他臓器転移、術後化学療法)、肺転移巣因子(術前他臓器転移、術式、肺転移数、最大径、肺門縦隔リンパ節転移、片側両側、術前 CEA)に関して検討した。【結果】年齢は 35 から 83 歳で平均 61.1 歳、性別は男性 67、女性 48 例、発生部位は結腸 49、直腸 66 例。Stage は、1 期：9、2 期：22、3a 期：29、3b 期：11、4 期：31 例。肺転移術前に肝転移があった例は 22 例で、全て外科的切除が行われていた。肺転移の術式は部分切除：70、肺葉切除：42、区域切除：3、両側手術は 30、複数回手術症例は 26 例(最高 4 回)であった。全体の 3 年生存率は 65.1%、5 年生存率は 33.0%、10 年生存率は 18.7% で、中央生存期間は 51 ヶ月であった。予後因子では、原発巣リンパ節転移数(1 個以下 vs 2 個以上)、肺転移数(2 個以下 vs 3 個以上)、肺術前 CEA 値(正常 vs 高値)で予後に差を認めた。他の因子では差を認めなかった【結語】原発巣リンパ節転移数、肺転移数、肺術前 CEA 値は予後規定因子となる可能性が示唆された。

P-235 骨軟部肉腫肺転移切除症例の検討

内山 美佳・川口 晃司・岡阪 敏樹・伊藤 志門
佐藤 尚他・谷口 哲郎・宇佐美範恭・横井 香平
名古屋大学 医学部 呼吸器外科

【目的】骨軟部肉腫は肺に転移することが多く、その治療は予後を左右する重要な因子と言われている。今回、肺転移切除症例を検討した。【対象】1996 年 1 月から 2004 年 6 月までに骨軟部肉腫の肺転移に対して切除術を施行した 21 例を対象とした。男性 12 人、女性 9 人。手術時の平均年齢は 40 歳(8—74 歳)。組織型は骨肉腫 11 例、脂肪肉腫 5 例、滑膜肉腫 2 例、線維肉腫 2 例、悪性神経鞘腫 1 例。術前 18 例・術後 19 例に ifosfamide、VP-16 を中心とした化学療法が施行された。原発巣切除時から肺転移発見時までの無病期間(DFI)は平均 18.7 ヶ月(2—84 ヶ月)で、1 年未満の症例は 12 例であった。切除個数は平均 1.6 個(1—5 個)、総手術回数は 30 回で、手術内容は部分切除 20 回、区域切除以上 5 回、葉切除以上 5 回であった。初回肺転移切除後からの平均観察期間は 42.1 ヶ月(4.8—107.8 ヶ月)である。【結果】全体の 5 年生存率は 49.3% (骨肉腫例 48.5%、軟部組織肉腫例 52.5%) で、8 例が 23—86.6 ヶ月無病生存中である。5 年以上の生存例は 4 例(骨肉腫 2 例、線維肉腫 1 例、滑膜肉腫 1 例)で、これらのうち 3 例に再発が見られたが、再手術や化学療法により長期生存が得られている。切除個数では 3 個までの症例で長期生存が得られたが、4 個以上の 2 例は 6 ヶ月以内に死亡した。再発は 13 例に認められ、再発部位は全て胸腔内であった。DFI では、12 ヶ月未満と以上の症例で予後の差は認められなかった【結語】切除個数が多いほど予後不良となる傾向は認められたが、DFI は予後を左右してはいなかった。骨軟部肉腫の肺転移は化学療法を組み合わせた積極的な転移巣切除により長期生存が得られる可能性がある。また再発部位は胸腔に認められることが多いため、術後の厳重な管理が必要であると思われる。

P-236 転移性肺絨毛癌の 1 例

我喜屋 亮・城間 寛
豊見城中央病院

(はじめに)子宮に原発巣の確認できない転移性肺絨毛癌は比較的まれな疾患である。今回検診発見、PET 検査を行い胸腔鏡下肺腫瘍切除術にて絨毛癌と診断がついた症例を経験したので報告する。(症例)30 歳、女性、出産歴有り、職場検診にて胸部異常陰影指摘され、近医受診。精査加療目的にて当院外科紹介受診となる。左肺下葉に約 10mm 程の結節を認め PET 検査にて明瞭な FDG 集積を伴っていた(SUVmax=3.7)、他の部位に集積は認めなかった。術前診断つかず、平成 18 年 4 月 5 日、胸腔鏡下肺腫瘍切除術を施行した。術中迅速病理にて転移性肺癌、原発巣不明と診断された。永久標本にて絨毛癌と診断された。子宮、両付属器に異常は認めず、HCG 値は軽度高値を示していた。化学療法目的にて婦人科転科となる。(結語)子宮に原発巣を認めない転移性絨毛癌の症例を経験した。出産歴があることより転移性と判断した。転移部位の検索に PET 検査が有用であったと思われる。